

『不正な管理人』 井上隆晶牧師
詩編90篇3～12節、ルカによる福音書16章1～9節

①【私たちは管理人である】

このたとえで「ある金持ち」とは神様であり、「一人の管理人」とは、私たちのことです。この管理人が主人の財産を無駄遣いしていることが主人の耳に入りました。主人は管理人を呼んで「お前について聞いていることがあるが、どうなのか、会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。」(16:2)といました。これは世の終わりの最後の審判を意味しているのでしょうか。神様はご自分が創造された世界をアダムに任せ「すべてのものを支配させよう。」(創世記1:26)といわれました。人間は管理を任せられたに過ぎません。でも今の世界を見てどう思われますか？世界を正しく支配し、管理していますか。人間は欲望をもって世界と自然を支配し、戦争と抑圧を繰り返しています。神様が見たら「人間に世界を任すのは間違いだった」と思われるでしょう。いつ管理を取り上げられてもおかしくないのです。個人の人生を見ても同じです。私たちは与えられた命、人生、時間、若さ、健康を浪費し、実を結ばないことの為に使い、今もそれをやめられません。

②【不正な管理人の取った行動】

管理人は考えました。「どうしようか。主人は私から管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。そうだ、こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。」(3～4節)彼は自分が無力であることを認め、将来のことを真剣に考えて準備をすることにしました。「そうだ、こうしよう。」とありますが、ニコライ訳では「われ、なすべきことを知る」となっています。彼が考えたことは、将来のために、他人に恩を売っておこうということでした。管理人は、主人に借金のあった人たちを呼び出し、借金の額を半額にしたり、減らしてやったりして、借金の証文を書き換えさせたのです。自分がまだ現役で働けるうちに、まだ権限があるうちに赦してあげたということです。これは明らかに横領罪、文書偽造罪であり、不正な行為です。

③【主人が褒めたのは】

ところが「主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。」(8節)とあります。ニコライ訳は「主は不義な管理者をほめたり。その為(な)しし事の、巧(たくみ)なるがゆえなり。」となっています。英語だと「The master commended the dishonest manager because he had acted shrewdly.」(主人は、彼が抜け目なく行動したため、不正な管理人を称賛した。)です。Dishonestは「不正、不誠実

な、いい加減な」^{シュレードリ}shrewdlyは「抜け目なく、賢い、洞察力のある」という意味です。神様が褒められたのは、不正ではなく、彼の抜け目のない生き方です。彼は、「もうどうなってもいいや」と、投げやりな生き方をせず、自分の無力さをすぐに認め、生きるために何をすべきかを判断し、実行に移しました。主は「この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。」(8節)と言われました。この世の人は実にこの世を手に入れることに熱心であり、行動力があります。キリスト教徒はそれだけの熱心さをもって神の国を手に入れようとしているのでしょうか。倣わなければなりません。

④【正しい人など誰もいない】

そしてイエス様は「不正にまみれた富で友だちをつくりなさい」(9節)と言われました。この世の富は悪ではありませんが、人間の悪や罪によって汚れやすいのです。この世で汚れやすい富を用いてでも善いことをしなさいというのです。これを読んで、神は不正を許されるのかと腹を立てる人もおられると思いますので、「不正」について考えてみましょう。ここには「不正」という言葉が3回出て来ます。キリスト教徒は「不正」が嫌いです。いつも正義を求めようとします。でも牧師をしていると自分をつくづく偽善者だなあと思います。偽善者とはギリシヤ語では「二つの仮面を持つ者」という意味です。クリスチャンという善人の顔と、悪人の顔です。とてもではありませんが善人になどなれません。今まで洗礼を受けて40年間頑張ってきたが、お手上げです。パウロの手紙の後半は、正しく生きなさい、善を行いなさいと書かれています。でも善人でもないのに、善を語らなければならない、善などできないのに、善を行わなければならないという聖書の矛盾があります。それは自分を偽って生きる事ですからとても苦しいのです。正しい方はキリストだけ、善いお方は神ですから、善を語るとは本当はキリストのことを語る事なのでしょう。

●先日、ホームレスのSさんと話をしました。彼はたまに金曜日の朝の祈りに参加し、その後教会の掃除を手伝ってくれます。植木の剪定などプロです。彼はもともとサラリーマンをしていましたが、ホームレスになりました。最初にホームレスになったのは広島で、寒さを防ぐために側溝に入って寝たそうです。その時、涙が出て止まらなかったそうです。港で寝ていた時、前に寝ていたホームレスの男性がボロボロの服を着ていました。ホームレス狩りにあって、若い兄ちゃんたちに暴行され、引きずり回されたそうです。Sさんは可哀想になって、前の日に汗を流して労働して得た「なけなしのお金」をすべて与えたそうです。ある時河原で寝ていると高齢の婦人が近づいてきて「何もないけど、私の食べ残しのパンがあるから、これでも食べ」と言って、パンの残り屑をくれたと言います。とてもではないが、食べれなかったと言います。そうかと思えば、路上で寝ていて朝目が覚めたら、枕元に封筒が置いてあり、中に5万円と「何も出来ませんが、温かい物でも食べて下さい」という手紙が入っていたというのです。仲間のホーム

レスに言うと「あるある、俺もそういう体験がある」という返事が返って来ました。Sさんは私に言うのです。「先生、善い事をする人は隠れています。自分を出しません。」

私は話を聞きながら、クリスチャンであるという事はどういうことか考えました。皆さんは、彼の様になけなしのお金 (little money) をすべて他人に与えたことがありますか？クリスチャンと言っても、善人などいないのです。「正しい者はいない。一人もいない。…善を行う者はいない。ただの一人もいない。」(ローマ 3: 10、12) と書かれています。歳を取ると、ますますこの言葉が確かに思えます。神の前では、私たちの有罪は確定です。正しく生きることも出来ないし、善い事もできません。それでもいいから偽善を行えというのです。それしか出来ないからです。管理人は自分の置かれた地位を使って偽善を行いました。本当に借金のある人たちのことを考えたのではありません。自分の利益のことです。彼らを憐れんだふりをして、彼らの借金を減らし恩を売ったのです。それでも良いと主は言われるのです。

●カトリックのクリスチャン作家である、曾野綾子さんが本の中にこんなことを書いていました。

・「日本では生きるということは、選択を伴ったものである。しかし私は途上国を歩いているうちに、生きることには選択もできない場合が多いことを知った。…多くの土地では、いい人として生きることなどやめて、できることをして生きて行くほかはないのだ。」

・「ほどほどの悪と共生して生きるという認識は、私の中で、非常に重大な意味を持つ。もし、自分の中に、ほどほどの悪の自覚がなければ、私は即座に人間を失うであろう。自分がかかりの人道主義者だなどと思ったら、その時から、誰もが腐臭を放つようになる。」

神様、わたしは善いことはできませんし、善人にもなれません。出来ることと言えば偽善だけです。だからわたしはあなたの救いが必要なのです。もしあなたが義人だけを天国に入れられるなら、わたしは入れないでしょう。不正とはわたしのことです。あなたはこの不正なわたしを受け入れ、また、わたしが地上で行う偽善を受け入れて下さいます。赦しはあなたのものであり、救いはあなたからのみ来ます。あなたのような善いお方は他にはおられません。わたしは偽善しかできませんが、善を憧れる心はなくなりません。あなたがわたしの中にその心を植え付けられたからです。あなたの側にいつもおらせてください。自分では善人になれませんが、あなたがわたしをいつか善にしてくださいますように祈ります。